超次元電脳戦争

雷炎寺　風雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超次元電脳戦争

【Ｎコード】

Ｎ３３８０Ｔ

【作者名】

雷炎寺　風雅

【あらすじ】

２０ＸＸ年。世界は一人の技術者により大きく変わった。その技術者は電脳戦場（サイバーフィールド）を開発したのだ。それは誰もが戦闘を気軽に楽しめる世界だった。戦う事により自らを強く成長させ、そして戦うためのスキルを獲得し、自分をより強くする。そんなシステムなのだが……。そんなサイバーフィールドに異変が起こり……。

序章　ある技術者の夢（前書き）

こんにちは。はじめに皆さんに言っておきたい事があります。自分は小説を書いたり、投稿すること自体初めてなので、少々変なところがあるかもしれませんが、直してほしいところがありましたらアドバイスお願いします。

序章　ある技術者の夢

２ＸＸＸ年。一人の技術者がサイバーフィールドというシステムを開発した。別称電脳戦場。それはサイバーシステムという機械を使うことによりその世界で誰もが戦闘を楽しむことが出来る世界。必要なものはそのシステムが備わったシステムゴーグルとハイパワースーツ。システムゴーグルは脳を操作するものであり、ハイパワースーツはそのゴーグルからの指令を受け、自分の力を普段の何倍にも発揮できるというシステムだ。それはモンスター達と戦いスキルを獲得して、現実世界では不可能な技能（魔術や浮遊術など）を使用してより戦闘を楽しむ事が出来る。しかし、実は現実世界でもその電脳世界（サイバーフィールド）で獲得したスキルは物理上で可能な範囲なら使用することが出来る。人並み外れた筋力、超破壊力（ギガントパワー）や超能力（ＥＳＰ）と言ったものだ。と、電脳戦場（サイバーフィールド）は人類の夢であり、開発した技術者自身の夢でもあった。その技術者は現在世界の極秘機密として超重要人物となっていた。

その技術者は他にもあるシステムをも開発した。生命体を原子レベルに分解する事により現実化したワープシステム。また、最強のサイボーグを造る為の強化骨格。それは自分の、人類の夢を創る為には誰も犠牲にしてはならないというその技術者の想いから自らの身をサイボーグにした。そしてもう一つはサイボーグだけでなく新たなロボットを開発する上で必要になる超人間的高知能（ヒューマノイドコンピュータ）を開発。人間の脳をベースにさらに改良を加える事により成功。さらに時空移動をも可能にしたシステムに開発した。そしてその男は天才技術、Ｍｒ．エグゼとして世界機密人物の人物の一人になった。

技術者の夢。それは高校生になった時に芽生えた。最初は何も知らず殆ど無知であったが、自分の夢を実現させる為、様々な努力を

した。その結果、現在に至るまでに成長したのだった。

こうして世界は変わり、人類に夢を与えた。しかし、その光が消え失せようとしていたとは、誰も予測出来なかっただろう……。

序章　ある技術者の夢（後書き）

はじめまして。前書き見ての通り小説を投稿するのは今回が初めてです。どうでしたか？いきなりにして世界規模、そして専門用語も（笑）。今回は天才エンジニア、Ｍｒ．エグゼの物語でした。これが全ての始まりです。実は自分は高校生でして、学生だけあって次話を書ける時間があまり無いのですがあれば続きも書きたいと思っているのでそこ等辺お願いします（泣）。因みに主人公はＭｒ．エグゼです。戦闘にも参加する予定です。サイボーグだから無敵かも（笑）。因みに由来は実行ファイルの拡張子　．ＥＸＥ　からきています。

最後に。感想やアドバイスなどがありましたらコメント宜しくお願いします。

第一章　悪夢の始まり

電脳戦場（サイバーフィールド）が開発されてから１０年。Ｍｒ．エグゼにより常に新機能を開発されると共にシステムのユーザーも確実に増えていく。その登録者数は膨大なものだった。日本では全国人口の７割が利用しているのだ。世界人口では６割近いユーザーがいるのだ。Ｍｒ．エグゼはユーザーデータ管理や電脳構造（サイバープログラム）の開発など忙しい日々に追われていた。

研究機関第一小学校。そこは地下フロアに研究施設がありながら地上フロアで小学生が普通に学生として通っている学校。この学校は４月の始業式が始まってから一週間が経つ。まだ学校生活に慣れない一年生から、もはや学校生活が日常化している六年生と、何も変わらない普通の学校なのだが。地下研究室ではウィルスやサイボーグやサイバープログラム、原子エネルギーの開発など様々な研究を行っている。

こう聞くと少し物騒に聞こえるが小学生や教師には何も影響は出ていないのだと言う。

学校も終わり、生徒たちは一斉に学校から飛び出し自宅へと向かった。親が待っている自宅。子供達にとっては当たり前な事だが、親を失って一人で暮らしている子供もいる。Ｍｒ．エグゼもその一人だった。今から２０年前。戦争によって家族を失い、友人も失った。今の彼が唯一安らげるのは、自分の夢の為に研究を続ける事だった……。

ある公園の広場では三人の子供達がサイバーフィールドで戦っていた。大原悠斗・水野美帆・久保晴樹。小学六年生である三人の名前だ。黒い短髪の可愛らしい少年が悠斗。小柄な身長である。単純

で元気な性格である。茶髪のツインテールに結んでいるのが美帆。少し控えめな性格である。金髪で緑色の瞳を持つ白人の少年は晴樹。性格は常に冷静沈着。父が日本人で母がイギリス人といったハーフである。

三人は戦闘を終えた。結果は悠斗の勝利に決まった。「僕の勝ちだ！」まだ能力値（ステータス）Ｌｖ．５の悠斗。しかし晴樹と美帆は悠斗以下のＬｖ．３であった。晴樹は舌打ちをすると「次こそお前を倒す」「昨日も負けたよね？」悠斗は内心喜んでいた。「晴樹。できる？」と美帆。「まだ実力が悠斗の方が上だから今まで以上に訓練しないとな」「（とか言いながら負けてばっかり……）」小さく独り言を呟き、溜息をつく美帆は、自分も諦めずに頑張ろうと心に誓ったこの日であった。

三人がそんな会話をしている中、ある科学者は自分の研究所で電脳破壊計画（チャルクラックプロジェクト）を立てていた。Ｄｒ．クラーク。Ｍｒ．エグゼと対等に肩を並べる程の天才ハッカーである。今回の目的は計画の名の通りサイバーフィールドを破壊し、世界征服する事。それが彼の最大の任務である。研究所にはクラークの他に数十人と言った構造破壊要員（クラッキングメンバー）をも準備。どれも天才ばかりである。企業から落とされた有能な者達が集まっている。「これより……”Ｖｉｒｔｕａｌ　Ｃｒａｃｋ　Ｐｒｏｊｅｃｔ”　を開始する……！」警察に逮捕されるなど百も承知であった。俺は終わった。そう思った彼は自分の技術を最後まで活かそうと考えた彼の為の計画でもあった……。

第一章　悪夢の始まり（後書き）

第一章ようやく書けました！なんかここまでくるのに随分時間かかったなー（泣）。第一章ではＭｒ．エグゼに続き、四人の人物が登場しました。小学六年生のＬｙ５の悠斗とＬｖ．３の晴樹と美帆。そして電脳破壊計画を実行した黒幕、Ｄｒ．クラーク博士です。三人の小学生は実は特別な部隊のメンバーです。次回、第二章に登場させるつもりです。次回もお楽しみに。

第二章　計画実行

Ｄｒ．クラーク研究所。彼ら技術者は計画を実行した。電脳構造（サイバープログラム）及び電脳回線（サイバーネットワーク）の破壊である。そしてサイバーシステムに異変が起こった。

研究機関第一小学校ではいつもの様に授業が行われていた。６－２組の教室では算数の授業をしている。「さて、この問題がわかる人。手を挙げて」と６－２組の担当教師が言う。女性教師である。名前は湯川玲子。年は２１歳。普通の新米教師である。因みに生徒達に答えてを求めた問題は分数の割り算である。五年生の復習と言ったところだ。「はい！」と手を挙げる少年。大原悠斗だ。「はい。では悠斗君」「はい。」黒板の前に立ちチョークを手に問題に答える。結果は、「はい正解です。良く出来ました」悠斗はお辞儀をすると自分の席に戻った。こんな感じに授業は進んで行った。

昼休み。給食を食べ終わった三人（悠斗・晴樹・美帆）は校庭のブランコに乗りながら話をしていた。「なあ。知ってるか？サイバーフィールドの噂」”噂”。本当にくだらないものもあれば一大事に至るものまで様々である。「うん。知ってる。サイバーシステムがハッキングされたってやつでしょ？」美帆が言う。「ああ。システムが破壊されるなんてやばいよな。何を考えているんだか」「これ僕が聞いた話なんだけど」悠斗が呟くように言う。「「何？」」晴樹と美帆は同時に訊く。「システムが破壊されるってことはネットワーク全体が崩れて個人情報は洩れてステータスにバグが発生したり色々大変な事になるらしいけど……」「「本当！？」」二人は驚いていた。

Ｍｒ．エグゼはその事態に誰よりも早く気付いていた。「くそ。

データが破壊されたらシステムだけじゃなく世界中で混乱が起きる。出来たら援護が欲しいのだが……」彼は望んでいた。システムユーザーにクラッキングに抵抗して欲しいと。彼はある手段にでる。電脳護衛部隊（バーチャルフォース）に依頼を求める事にした。

電脳護衛部隊（バーチャルフォース）。それは警察組織の一部である。サイバーフィールドでは能力を利用した犯罪が起きている。その為に作られた組織がこの部隊なのだ。サイバーシステムを利用した警察組織。実力の高い者達が集まる組織だ。この組織は１０歳以上である事とＬｖ．３以上である事が入隊する条件である。２０歳以上の大人が多いのだが１５歳以下の子供は数十人といったところである。

バーチャルフォース基地。そこに悠斗・晴樹・美帆の三人がいた。彼らもこの部隊の一員だった。悠斗はアナウンスで呼び出しがあった為、局長室まで向かった。

ドアをノックする悠斗。『入ってくれ』ドア越しに男性の声が聞こえた。ドアを開けると部屋に入る。デスクの上で頬杖しているのがバーチャルフォース局長である。年齢は６０歳だ。「さて、君を呼んだのは他でもない。ある人物からの任務だ」「誰ですか？」「Ｍｒ．エグゼだ」「ええっ！」三人は驚いた。「そ、それって機密人物の……ですか……！」「ああ。彼からの任務だ。君はこれからＭｒ．エグゼに直接コンタクトをとってもらう。その為に彼の研究所に向かってくれ。任務の内容は彼から聞いてもらえ」「はい！」そして悠斗はＭｒ．エグゼのいる研究所に向かった。

ＭＲ．エグゼ研究所に着く。

研究所内に入る。無機質な場所で、恐怖を覚える。暫く歩いていると、「来たようだな」と後ろから声が。「わっ！」「何も驚かなくても」「あ、あなたがＭｒ．エグゼ？」「ああそうだよ。そういえば任務の内容は局長から聞いたかい？」「貴方から聞いて欲しい

と言われて……」「うむ。わかった。これから任務内容を話す。過酷なものになるが覚悟は出来ているな？」「はい！」

Ｍｒ．エグゼの依頼。それは仮想空間（バーチャルリアリティ）で、敵と戦い、ウィルスやプログラム崩壊を防いで欲しいというものだった。「さてと。内容はわかったかな？悠斗。君はＶＲの世界に行ってもらう」「どうやって？」「着いて来て欲しい」「う、うん」

言われて着いた場所は狭い一室だった。コンピュータが並んでいる空間の中心にヘッドセットが付いている椅子が置いてあった。「この椅子に座って欲しい」「わかりました」言われた通りに椅子に座る。「あの……」「なんだ？悠斗」「何で僕だけ呼んだの？」「君は……。そうだな。他の人物でも良かった。けど私の事を知ってもらいたいと思って君を選んだ」「え？」「そのうちわかる」どういうことだろう。今の悠斗にとっては何も解っていなかった。「この機械って何ですか？」「ああ。君が座っているＶＲマシンを制御する為の物だ」「そうなんですか」「では、始めよう」「はい」Ｍｒ．エグゼはヘッドセットを悠斗の頭に着ける。前方が何も見えない真っ暗な空間になった。そして悠斗一人の過酷な任務が始まった。

第二章　計画実行（後書き）

第二章です。今回はバーチャルフォース局長に呼ばれた悠斗が研究所でＭｒエグゼと出会い、任務の内容を聞いたという話でした

実はＭｒ．エグゼと悠斗にはある深い関係があるのですが、それはまたいつか書きたいと思います。では今日はここまで。今回はどうでしたか？書き方がが何も変わっていないような気がして……（汗）。

第三章　ある女性の過去（前書き）

こんにちは。今回以降は描写がワンパターンになるかもしれません（戦闘シーンが多くなるかも）。今回はまだ大丈夫かと。

第三章　ある女性の過去

悠斗はＭｒ．エグゼの依頼の為、仮想空間（バーチャルリアリティ）にいた。

どこからか声が聞こえる。それは空間内を反響させているように思える。＜悠斗。これから敵が容赦なく君を襲ってくると思う。だが私も援護する＞「どうやって？」＜プログラムだよ。ウィルスに対抗する為のプログラムを作成する。それで君も戦い易くなるだろう＞「わ、わかりました」すると早速目の前に青い人影のようなものが現れた。＜こいつらはウィルスだ！早速戦ってくれ。ウィルスが擬人化した者と思えば良い。ウィルスレベルは１だ。ステータス敵にも弱いだろう＞「はい！」悠斗はウィルスに向かって拳をぶつける。するとウィルスは地面へ転がり倒れた。そして光となって姿を消す。＜これで駆除された。これからは壮絶なものになると思うが覚悟の上で戦ってくれ！＞そして悠斗とＭｒ．エグゼの長い戦闘が続いた。

バーチャルフォース基地。地下一階にある訓練場で晴樹と美帆はステータスの成長に努力していた。訓練の内容は１００人抜きといった所だろう。『トレーニングオールクリア。晴樹のレベルは４になりました』女性の声が耳に響く。「よし。今日はこれくらいにしようか」「うん。そうだね。私なんでレベル上がらないんだろ？」「まあ、努力次第だな」「ん……」「どうした？」「ううん。何でもない」訓練場を出た二人。その前にある人物が立ち塞がっていた。年齢は２０歳に見える。「あ、冷夏さん」小さく言う美帆。冷夏（れいか）。彼女の名前だった。「どうした？」晴樹が訊いた。「あなた達にも依頼が届いているからそれを教えておこうかなって思ってね」「「依頼って何？」」二人は同時に言う。「そうよ。にしても」鼻で小さく笑う冷夏。「息ピッタリね。これなら問題無いかしら？」

１０年前の出来事。
冷夏。彼女はこの世界の人間では無い。科学者によって作り上げられた軍事用クローン。改造された身体。運動能力は人並み外れた筋力を持ち、知能はＩＱ２００以上。彼女は元々普通の人間のＤＮＡから産まれた。一人の少年のＤＮＡから。そう、オリジナルに対して異性のクローン体なのだった。女性にはＹ染色体しか持たないのに対し、男性はＸ・Ｙと両方の染色体を持っている為異性のクローンを造る事ができると言った理屈である。しかし産まれたばかりの彼女は培養器の中で思った。自分の存在価値は何なのだろうかと。自分を待っている人は誰もいない。彼女は自分の存在意義を疑わしく思っていた。そして全てが疑わしくなったのだった。
ある日。彼女は牢屋の中で一人の男性の博士に話を聞かされた。＜君のオリジナルである少年は戦争によって戦死した＞と。そして彼女は思った。これで本当に自分はひとりぼっちなのだと悟ったのだった。オリジナルが生きているという事を知っていただけで幸せだった彼女に更なる不幸が圧し掛かったのだ。そしてまだ５歳だった少女は決断した。＜私あの人の気持ちが知りたい！だから私も戦う！！＞そう決心した。少女は戦場で敵を殺す。これまで何人もの兵士達を殺してきただろうか。それでも冷夏は　”あの人”　の気持ちを理解し、少年の苦しさが解った気がした。しかしその少年の苦痛はそれだけではなかった……。

第三章　ある女性の過去（後書き）

ついに三話目まで来ました。今回はサブタイトル通り、少女、冷夏の想いです。クローン体である冷夏は、オリジナルの少年が戦死したという事を聞かされた冷夏は戦場に行き、敵と戦い人の死を見て、兵士の苦痛を理解した少女の話でした。

今回のメインは冷夏です。後一つ。これからの主人公は悠斗になります。ＶＲで戦う悠斗をメインに書いていきたいと思います。今後もよろしくお願いします。

第五章　戦闘開始

バーチャルフォースは街で激しい戦闘を繰り広げていた。街の住民たちは避難用の地下街にいるため、この街には数人のバーチャルフォースとウィルスモンスターしかいない。

「くそ！」舌打ちをする晴樹。彼が戦っている相手は一人では到底無理だろうと思われる相手だった。巨大なウィルス生成体、ボスエイリアンだった。恐らくＬｖ７を超えていると思われる。

ステータスレベルは０から最大値の１０までで形成されている。この世界でＬｖ．７を超えている者は数少ない。バーチャルフォースでさえ、現時点で三人しかいない。

「これじゃ歯が立たない」すると晴樹の上を飛び越えるように現れたのは三人の男女だった。「俺達はコイツと戦うからアンタは仲間と応戦してやってくれ」三人は武田真・海原亮・鈴木玲。Ｌｖ．７を超えている三人だ。「ありがとう。けど俺も戦う」「お前はまだＬｖ．６だろ？」「それだけあれば十分だと思うけど」戦闘中に晴樹はＬｖ．４からＬｖ．６に変化していた。「だがな。これ以上無駄な犠牲者は出したくない」「けど戦う！！」「わかったよ。なら本気でやれよ！」「了解！」そして四人の激しい戦闘が始まった。

ＶＲでは悠斗とＭｒ．エグゼが戦闘に励んでいた。

戦闘が落ち着いた頃、「エグゼ？」と悠斗は聞いた。『なんだ？』「サイバーシステムについて詳しく教えてくれないかな？」『なぜだ？大体の事は解っている筈だ』「僕達の知らないような事、エグゼなら知ってるかなって思って」『なるほど。この話は聞いたことあるか？』「何ですか？」少し間が空く。『電脳戦場（サイバーフィールド）で得た能力は物理上で可能なものならシステムを利用しなくても使えるという話だ』「それなら聞いたことあるけど。それが何？」『それは真っ平な嘘だ』「え？どうして？」『うむ。システムゴーグル、システム

スーツは役割を果たしていてな。ゴーグルは脳の制御。スーツは筋肉や細胞組織の制御というそれぞれの役割を持っている。つまり、仮にその力が現実上で使用可能になった場合、脳には激しい負担がかかり、筋肉は悲鳴を上げ、最悪死に至るというものだ。』「え……。知らなかった」『無理も無い。この機能は採用しようとしたがこのような問題が発生した為に取り止めになったんだ』「そっか。後は何かある？」Ｍｒ．エグゼは思い当たる事を探ってみたが『いや、それぐらいだな』「そっか。ありがと」『そうだ。構造（プログラム）を捜索してみて解った事があるんだが、君に新しい任務を頼みたいと思う』

任務の内容。それは巨大ウィルス生成体、ボスウィルスを倒す事だ。また、ボスエイリアンはサイバーフィールド上でモンスターを生成し、ボスウィルスは仮想空間（バーチャルリアリティ）上でウィルスを生成するという違いを持っている。

内容を全て話したＭｒ．エグゼ。悠斗は了解した。そして新たな任務が始まり、それは今まで以上の苦闘の始まりでもあった。

第五章　戦闘開始（後書き）

第五章きました。こんにちは。六章以降はこんな感じになると思います（汗）。バーチャルフォース達のサイバーフィールド上による戦闘とＶＲでＭｒ．エグゼと悠斗が戦うＶＲ上での戦闘の繰り返しです。ずっと一本線になるかもしれませんが、イベントを考え中です。ではまた次話で。

第六章　Ｍｒ．エグゼの過去

仮想空間世界（バーチャルリアリティ）。悠斗は延々と天に続く長い階段を進んでいた。ウィルスは現れない。「エグゼ？どうなってるの？」『大丈夫だ。間違いなく目的地に進んでいる。恐らく相手が何かを仕込んだのだろう』「そっか。ありがとう」

足を進める悠斗。階段は終わり、ある空間が出現した。辺りを見渡すと、それはキューブ状の空間であることがわかった。

「あ……！？」後ろを振り向く悠斗。上ってきた筈の階段が消えていた。すると頭痛がするほどの甲高い音が空間内を響き渡った。思わず身体をそちらの方に向ける。すると何も無かったはずの空間から赤黒く輝く巨大なクリスタルが出現していた。よく見るとそのクリスタルの中に、ある生命体の様な何かが。と、刹那。そのクリスタルは爆発したかのように破裂する。余りの驚きに尻餅がついた。そして、少年の目の前に現れたのは、ドラゴン。東洋の神話に出てくるような蛇の姿をした龍だ。『悠斗！そいつが目標（ターゲット）だ！そのドラゴンを倒せ！』「無理だ」その声の主はドラゴンだろう。「今のお前は私を倒すことは出来ない。実力が違いすぎる」「……っ！」舌打ちをする悠斗。「それでもお前を倒す！」ドラゴンは鼻で笑うと、「身の程知らずだな。まあいい。相手をしてやろうか」ステータスはＬｖ．８を超えているかと思われる。今の悠斗はＬｖ．６だが、ドラゴンが言う通りステータスに大きな違いがあった。『勝手な事をするなラルド。』「ちっ。そもそも戦う気などないのだが……」ラルド。恐らくドラゴンの名前だろう。『誰だ！』Ｍｒ．エグゼが聞いた。『忘れたか友よ。私はクラークだ。私がこの計画を実行したのだ。』『貴様が……』エグゼよ。私と戦え。』『だが……』『戦いを嫌っているのは解っている。お前は誰よりも人の痛みを一番理解しているからな』黙り込むエグゼ。『少し時間をくれ』『解っ

た。いいだろう』「クラーク！私は私の場所へ行こう」『ああ。そうしてくれ』するとドラゴンは空を飛んで何処かへと消えていった。

そして数分が経った。『どうだ？覚悟は出来たか？』『ああ』『ではＶＲへ来てくれ』『そのつもりだ』

Ｍｒ．エグゼは別のＶＲマシンを利用し、悠斗のいる空間へ飛んだ。

既にＶＲに着いていたクラーク。「うむ。良く来た」「……」「どうした？」「まさか……。貴様が全ての元凶だったとは」「ふん。まあそう言ったところだな。その少年に何か言いたいことは無いかな？」「え？」悠斗は聞いた。「そうだな。私の全てを話す時が来たようだ」

時を遡（さかのぼ）る事２０年前。世界はある計画を実行した。遺伝子生命体生成計画というプロジェクト名。その為に東京のある街を”実験都市”として世界中の子供達を強制的に閉鎖した。このプロジェクトの最大の目的は人々の優性遺伝子を利用して最強のミュータントを造り出すと言ったものだった。その為に科学者達は子供達に様々な人体実験を行った。超能力に覚醒させる為に脳を弄ったり、ＤＮＡ配列を組み替え、人並み外れた破壊力を覚えさせたり。そんな実験が続いた。実験の犠牲になる子供も少なくなかった。Ｍｒ．エグゼはそんな実験の被害者だった。実験をより良く行う為に自分のＤＮＡマップを提供し、実験用及び軍事用クローンを多様に生成したり……。様々な実験を行われた。

そして全てを話したＭｒ．エグゼ。「……」「そして、後一つ話すことがある」「なに？」「お前の親は……」「ん？」「私だ」「……何、言ってるの？だって僕―――」「あの二人は里親だ。今のお前が覚えていないだけでな」「え？……うそでしょ？」「本当だ」

「え……？」目が潤う悠斗。「突然で悪かったな。しかし事実なんだ」「う……け、ど……ぅ……」「そして、最後にもう一つ」「……？」Ｍｒ．エグゼは悠斗の父親であるという事を告げた。「なん……で？」「……。いずれかは再会できると思っていたが、……まさかこんな場所とはな」。

全ての事実を受け入れた悠斗だった。

第六章　Ｍｒ．エグゼの過去（後書き）

第六章です。Ｍｒ．エグゼと悠斗は実は血を引いた親子でありＭｒ．エグゼは２０年前の実験の被害者だった。というのが今回の話でした。次話をお楽しみに。

第七章　Ｍｒ．エグゼ　ＶＳ　Ｄｒ．クラーク

「話は済んだか？」全てを悠斗に打ち明けたエグゼは小さく頷く。「エグゼ。戦いを始めよう」「そう……だな。そうだ。悠斗」「な、なに？」涙を拭い、堪える悠斗。「離れてろ。近くにいると危険だ」「う、うん……」暫くの間、沈黙が続いた。

「さあ、始めよう！」クラークが言う。鼻で笑うエグゼ。挑発に乗ったのかクラークはエグゼに拳を入れる。

安易にその攻撃を跳んで交わしたエグゼは、クラークの背後に回り込み、勢い良く回し蹴りをし、右脇腹に直撃する。「ぐっ……！！」そのまま吹き飛ばされるクラーク。空間の周りを覆うようにして出来ているバリアにぶつかった。

身体を揺らしながら立ち上がるクラーク。「……。やはり……な」「どうした」「お前はサイボーグ。人間以上の身体能力を手にしている。ならば、私は人間以上の頭脳を手に入れればいい！」「どういう事だ！？」「見ていれば解る……！！」

両手の掌（てのひら）を上へ向け、意識を集中させるクラーク。するとその手から、青色の炎が現れる。「発火能力（パイロキネシス）……！！何故お前が」「実験だよ。脳の実験だ。２０年前。俺は軍の力になる為に超能力を習得した」「軍隊……か」「ああ。電極で脳を弄られ、体内のリズムを狂わす為に薬漬けにされたな」「そうか……」「どうした？まあいい。これからが本番だ。気を抜くなよ」「分かっている」と言うとエグゼは意識を集中させ、身体からプラズマのようなものが現れた。「雷は、機械特有のものだからな。使えて当然か」「しかし、こいつは意識次第で強度を変えられる」「そう、プログラムされているのだろう？」「だろうな」「雷と炎。どちらが強いか確かめよう」「確かめるまでもないだろう？」「それは、解らないぞ」

二人はそれぞれの能力（ちから）を最大限に発揮する。そして……。お互い

一斉にその能力をぶつけた。競り合う雷と炎。それは互角そのものの様に見える。「ぐっ……！」舌打ちをするクラーク。「どうした？その程度か？」「違う！！」「やはり。人の脳では限界があるな」「ふざけるな……！！！！！」すると、雷の力によって打ち消された炎は空間を包み込むような閃光と共に音速を超える速さでクラークに直撃した。

クラークは仰向けになって、倒れていた。

しかし、この勝負はまだ終わらなかった。

第七章　Ｍｒ．エグゼ　ＶＳ　Ｄｒ．クラーク（後書き）

第七章まで来ました。今回はエグゼとクラークとの戦いでした。
今回はここまで。まだまだ続きます。次回もお楽しみに。

第八章　全ての決着

仰向けになって倒れているクラーク。しかし、そのボロボロの身体が再び起き上がった。（あの雷撃を食らってまだ立ち上がるとは……）エグゼは思った。人為の雷とは言え、それは自然現象の雷そのものだ。それを真っ向に受けたら一溜りも無いのだが……。「エグゼ……。これからだ……！！」クラークとエグゼ。二人は睨み合っていた。

電脳戦場（バーチャルリアリティ）。Ｌｖ．８になった晴樹と美帆。二人はボスエイリアンと戦っていた。巨大な右腕と左足を振り回すボスエイリアン。二人はその攻撃を見切っていたのか即座にその攻撃をかわす。「行くぞ、美帆」晴樹が合図を送る。美帆は小さく頷いた。すると、大声で叫ぶ二人。渾身のフルパワーを出し、その拳はボスエイリアンに殴りかかる。

突然奇声を上げるボスエイリアン。その身体は一瞬にして砕け散った。そして生成されたモンスターは液化した。

仮想空間（バーチャルリアリティ）

「ここまでだ。エグゼ」「どうした？」「貴様はここで終わる！」「それは……お前だ」するとエグゼは両手から炎を出し、エグゼに向かって飛んでいった。それをすばやく跳んでかわしたエグゼは勢い良くその人差し指から音速の雷を飛ばした。それを避け切れなかったクラークは正面から雷撃を受け……。「どうやら意識が無いようだな……」その光景を目前に何も言えない悠斗。こうしてクラークとエグゼの戦いが全て終わった。

第八章　全ての決着（後書き）

第八章まで来ました！クラークが死んだという事で、次回以降、最終回に近づいて来ます（次話で最終回？）。とにかく短かった（汗）。今日はここまで。ありがとうございました。

伝わってるかなぁ、この描写（汗）。

最終章　最後の戦い

エグゼとの戦いに敗れ、死亡したクラーク。悠斗は目的に向かって走り続ける。決して果てることの無い空間。それはまるで宇宙のようだ。

ウィルスがコンピュータにより自動的に生成されている事が解ったエグゼは、ハッキングによりそのシステムを破壊。そしてそれと同時にクラーク研究所のコンピュータも全て再起動できないよう完全にシャットアウトされた。成す術を無くしたクラークの要員達は電脳警察（サイバーポリス）に見つかり、要員達は逮捕されたらしい。

エグゼの指示により目的地に辿り着いた悠斗。目の前には球状の巨大なバリアの様な奇妙な物体が浮いている。その中には、クラークとの接触時に逢ったあのドラゴンの姿があった。『悠斗、あれが目的としていた敵だ』「うん。ウィルスボスってあの龍の事なんだ」『ああ。今の君の能力値（ステータス）ならデータ上、あいつと十分戦える強さを持っているだろう』悠斗は現在Ｌｖ．１０。つまり能力値の最大に達している。「頑張ってみる」『ああ……。そろそろ時間だ』「……？」

すると、包んでいたバリアは甲高い音と共に爆発し、そこから人間の姿をした謎の男が現れた。背中に翼が生えているのが分かる。「あの時の少年か。見違えるほど強くなったな。これなら互角に戦えるかもしれん」「これでも、互角……？」どうもこの男は一目で能力値が分かるようだ。「ああ。まあ、一度戦ってみれば解るだろう。準備は良いか？」優しかった悠斗の瞳はそのドラゴンを睨み付けるように目つきをを変える。「お前は、誰だ……？」「それはその内分かるだろう」

こうして、二人の決死の死闘が始まった。

悠斗は冷静になる。彼が見る限り、奴は余裕な感じに見えた。「こちらから行くぞ」すると、突然猛スピードで襲い来る男。そして、悠斗に蹴りを入れる。それを飛んで交わした悠斗は男の後ろに回り込み、腹部に拳を入れた。だが、呆気(あっけ)無くその攻撃を別の手で止められた。「……！？」「さあ、ここからだ」すると、男は右で膝蹴りをし、腹部に直撃した。「ぐっ……！」そして、今度は別の左足で悠斗に回し蹴りをする。「……！！！」脇腹に打撃を受けると同時にすっ飛ばされた。

体勢を変え、地面へ着地する。「その程度か？」「……！」悠斗は舌打ちをした。

こうして二人の激闘が始まった。

悠斗が思った以上に強く、男は少し苦戦していた様だ。お互いに身体はボロボロだ。「流石だな。しかし、お前もこれまでだ」「なに……！？」

すると、謎の男は身体中が光に包み込まれる。そしてゆっくりと浮上しながら身体のシルエットを変える。

そして、光が空間全体を包み込んだ刹那、男はあのドラゴンの姿になっていた。「あ……」その姿に悠斗は驚いた。

『悠斗！何もするな！今そこへ行く！！』叫ぶＭｒ．エグゼ。「どうしたの？」『こいつはもうお前には、いや……。誰にも倒す事は出来ないだろう』「え？」『私の出番が来たようだな……』「エグゼ？」「待っていろ」「う、うん」

仮想空間(バーチャルリアリティ)に姿を現すエグゼ。「どうしたの？」「お前はここで待っていろ」「え？」「もうこうなっては勝ち目は無い。まさかとは思っていたが……。悠斗」「なに？」「お前は良く頑張った。後は私に任せろ」

何の事だろう。と悠斗は考えていると、突然エグゼは右に拳で悠斗

の腹部を殴った。「……！」黙って立っているエグゼ。悠斗は腹を抱えながら地面へ倒れた。そして、彼は意識を失った。

気が付けば悠斗はベッドの上で眠っていた。そこがエグゼの研究所だったと気付いたのは少し経ってからだった。しかしどこにも彼の姿は見あたらない。

研究所を探索する悠斗。しかし彼はどこにも居なかった。するとVRでの出来事を思い出した悠斗はあのVRマシンのある部屋へと向かう。しかし、マシンは破壊されていた。「あ……」思わず声を漏らす。それがどういう意味か悠斗にはすぐ分かった。まだエグゼは仮想空間に存在しているだろう。それがどういう意味か悠斗にはすぐ分かった。

その後、今後このような事件を起こさない為に、サイバーシステムは完全にシャットアウトされ、サイバーフィールドも破壊。そして仮想空間（バーチャルリアリティ）も完全に破壊された。しかし破壊した者は不明らしい。

Mr．エグゼは現在行方不明であり、音信不通らしい。

Mr．エグゼはあのドラゴンを破壊した。

彼は事件が起こってから気付いていた。

電脳戦場（サイバーフィールド）を作るべきでは無かったと。

そして、サイバーシステムを破壊。それと同時に電脳戦場も破壊される。そして仮想空間をも破壊し、自らの命を絶った。

そして世界には平和が戻った。

最終章　最後の戦い（後書き）

最終章です。どうでしたか？最大の目的を果たしたエグゼは空間を破壊。そして世界に再び平和が訪れたと言う話でした。

ここまで最後まで見てくださった方、まだまだ未熟な自分ですが本当にありがとうございました。

もし良かったら感想やアドバイスなどのコメントがありましたら宜しくお願いします。

何かバッドエンドになった……。（^^；；；；

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3380t/

超次元電脳戦争

2011年10月9日01時02分発行